午後３時10分開議

米原蕃委員の質疑及び答弁

永森委員長　休憩前に引き続き会議を開きます。

米原委員。あなたの持ち時間は60分であります。

米原委員　私で最後の質問者になりました。

今議会定例会で、多くの議員の方々から公共交通に関する課題についてたくさん質問がされました。改めて、過去から今日までの経過を踏まえながら、私なりにまたお尋ねしたいことがございますので、よろしくお願い申し上げたいと思います。

皆さん、タブレットを使っておられますが、私は、今日パネルを用意しております。これは、２年前に一度、皆様に御案内したことがございますが、もう既にお忘れになった方もいらっしゃると思うし、初めての方もいらっしゃるかもしれませんが、私が作ったものなので、ぜひまた富山県の現状を御覧いただきたいと思いますのでひとつお願いします。

永森委員長　米原委員、掲示するときは許可を求めてください。

米原委員　掲示の許可をいいですか。

永森委員長　許可します。

米原委員　ちょっと小さくて分かりにくいかもしれません。これが富山県の公共交通の鉄軌道の歴史であります。２年前に私はこのパネルを使って、今の富山県の鉄軌道がこのような現状だということを皆さんにお見せいたしました。考えてみますと、大変な歴史があるなということを改めて実感いたします。先人の皆さんが大変な苦労をされて、富山県の産業、経済のために御尽力をいただいて歴史を

積み重ねてこられたことを、この状況を見て感じます。このほかに、笹津線とか射水線だとか加越線なども当時はあったんですが、これらは廃止になっておりますけれども、現在残ったのがこの現状かと思います。

何を申し上げたいかというと、この今の鉄軌道を御覧いただきながら、富山県はどういう歴史を歩んできたのか、今日に至ったのかということを少しお話し申し上げます。東海道新幹線の代替補完機能、これが北陸新幹線、北回り新幹線でありました。北回り新幹線でありますが、北陸３県の大変な悲願でした。この北陸新幹線が富山にも通るようになる。そういたしますと、北陸本線、当時の在来線をどうするか、こういったことは当然、当時のＪＲ西日本から富山県にいろいろと御相談があって、いわゆる在来線を富山県でお引き受けいただきたいということになって、いろんなことを検討して、現在のあいの風とやま鉄道を会社設立して、そして在来線の経営を引き受けたと、こういう歴史があるわけです。

簡単にできたものではなく、いろんな背景があってこうなったということです。新幹線が入ってきて、北陸本線をどうするか、これは守らないといかん、同じことを申し上げますが、この鉄軌道のあいの風とやま鉄道でもって運営を引き継いできたという歴史です。

もう一つは、新幹線の駅ができれば、富山の新幹線の駅が大きく変わりますので、富山市が中心になって進めておられるこのまちづくりの中で、前の森富山市長が、富山港線をどうするか、このことについても検討することになりました。そして、森市長はこの富山港線、いわゆる富山の駅から中島、蓮町を通って岩瀬へ行く区間でＬＲＴの導入を図られました。いわゆるライトレールにされて、富

山の南と北を結んだと。

また、市内にこの電車を走らせようと、新しい駅をつくって、これは環状線として現在走っています。これもやはり、森元市長は大変な苦労をされて、公共交通としてのまちづくりに貢献されたということであります。

私はこのことについて随分、森元市長からいろんなことをお聞きしたし、またお尋ねをしたことがございますが、相当の時間をかけてＪＲとも交渉されましたし、県の皆さんとも交渉されました。そしてまた、国交省との関係の交渉にも当たられましてこの形ができたということ。この富山港線からライトレールができたことによって、新しい駅もできました。そして、在来線が新しくなってから、その周辺がにぎわいを取り戻してきたんですね。

今日、大井委員がいらっしゃいますが、岩瀬も随分人が少なくなって観光にも影響が出ていたのですが、最近はライトレールによって、たくさんの人でにぎわいを取り戻してきている。これはやはり、在来線を新しくしたからこういった状況になってきたということも皆さん理解されるのではないかと思います。そういう中で今日まで至ってきた。

そして、駅ができればその周辺に住環境もできる。ただ走るのではなくて、どういうふうなまちづくりをしていくのか、そういう仕掛けをしてまちづくりをするということを考えていくというのが、私たち地方としては極めて大事なことではないかと思います。

したがいまして、私は何を言いたいかというと、前富山市長のこの英断、それから今日までの御労苦、コンパクトシティーという、全国にもモデルとして大変な評価を得るまでに富山県が発展をした

ということに対して、私は改めて敬意を表したいと思います。

そこで質問に入りますが、将来の富山県の公共交通の在り方について、今パネルで御覧いただきましたが、こんなにたくさん、この富山県にあって、このままで全部が運営できる状況ではありません。

ちょっと石川県のパネルを見てもらえませんか。石川県はこんな状況です。本当にすっきりしています。今から見れば前はもっとあったんですが、これもすっきりと整備されました。

次、福井県を御覧になってください。福井県も今は少し整理されて、公共交通の新しいライトレールも走っておりまして、私たちも見てまいりました。こうした周辺のいろんな県の視察もしてまいりました。

それから、私たちはもっと10年ほど前から、新幹線が入ってくるという仮定で、富山県のこれからの在来線の在り方、公共交通の在り方をどうするかということを実にいろんなところを見てまいりました。南里部長から御紹介いただいた、滋賀県の三日月知事さんに御紹介いただいて、近江鉄道も行ってまいりました。そして、いろんな経営的なこともお聞きして、これからのいろんなことについてもサジェスチョンをいただいてまいりました。

さらには、東北の震災の後、数年間のうちに、鉄軌道がどうなっているか、三陸鉄道をはじめとしていろんなところも見てまいりましたし、九州も見てまいりました。四国の愛媛、それから高知も見てまいりました。長野県のしなの鉄道も見てまいりました。いろんなところで今、公共交通がこうして変化をしてまちづくりをしているというところを見てまいりました。

そして、今日の富山県の状況というものを今ようやく、田中交通

政策局長、そして牧野次長さん、国交省から来ていらっしゃる有田課長さん、あるいは黒﨑課長さんをはじめとして、富山大学の中川大先生、いろんな皆さんの知識をいただいて検討して積み重ねておられます。今、この城端線・氷見線沿線の方々にもお話をし、私たちも直接お伺いして、首長さんとも協議をして、その皆さんの意見がどういう状況かをしっかり受け止めながら、また、いろんな検討を積み重ねて、そして今日に至ったということです。７月30日に城端線・氷見線再構築検討会が行われたということでありますが、こういう過程を経てきて、その上で、どんなふうにこれを受けて、これから対策を考えようとしていらっしゃるのか、まずそのことを伺っておきたいと思います。

田中交通政策局長　城端線・氷見線の話ですけども、鉄道のいろんな背景の話、今委員から御説明ありました。

城端線・氷見線について、令和２年の１月に新しい交通体系の検討に関するＪＲ西日本からの提案がありました。これを受けまして、まちづくりも含めて協議検討を進めてきたと。それで、今年の３月末に、当時のＬＲＴ化検討会の検討を出して、新型鉄道車両の導入を目指すとなったわけであります。

その後、方向性が決まったものですから、今ほどありましたけど、よりスピード感を持って取り組むために、新田知事、また４人の市長さん、ＪＲ西日本の金沢支社長さんという方をメンバーに検討会を立ち上げまして、今ほど話がありましたが、初回に利便性向上策を実施計画に盛り込むと。２回目は、あいの風とやま鉄道の日吉社長にも参加いただいて、さらに議論を進めていると。このような状況であると思っております。

米原委員　今協議を進めておられる中で、新型の車両をどういうふうに導入するかとか、それから両線の直通化をどうするかということも今検討されておりますし、新駅をどうするかということ。ＩＣカードも使えないということなので、こういったことも使えるようにしなきゃならんとか。

そういったことも含めて、ＪＲ西日本とのこれからの交渉――先ほどの石川県のＪＲ西日本社との関係の打合せであるとか、そんなことなどを考えながら、さらに、冒頭申し上げた、あいの風とやま鉄道をつくるときのＪＲからのいろんな状況の中で――これは砺波の夏野市長が当時まだ県にいらっしゃった頃にいろいろと交渉に当たったと聞いているわけですが――、経営安定基金というのも、いろいろと交渉になったということもちらっと耳にしたんですけどね。これからこの引受け手の中にはそういったことも考えながら、沿線の皆さん方とどうこれを取り組んでいくのかということもやはり考えていかねばならないと思うんですが、その辺はいかがですか。

田中交通政策局長　委員からお話のありました砺波市長のお話ですが、先日、新聞報道されておりましたけど、将来、ＪＲ西日本からあいの風とやま鉄道に運行を移管する場合、既存路線の並行在来線の経営安定基金とは別会計で城端線・氷見線の経営安定基金をつくりたいと、このような意向の記事が報道されていることは承知しております。

今お話にありました鉄道事業再構築実施計画では、地方公共団体やその他の社による支援の内容も項目の一つとして定めることとされております。このため、基金の設置についても、城端線・氷見線の安定的な路線の維持のため協議していくことになります。

米原委員　そういうことをきちんとやってから、その上であいの風とやま鉄道に、さあ、後のことをしっかり引き受けていただけませんかという、やはりそういう過程を経ていかねばならないと思うので、ただ、こうだからさあやってくださいよということでは、これはあいの風とやま鉄道さんだって困ると思いますね。

そういったことをきちんと整理して、そしてちゃんと受けやすいような環境を整えた上でお引受けいただくというのが私は極めて大事ではないかと思いますので、ぜひそういった点をよろしくまた御理解をいただきたいと思います。

さて、北陸新幹線開業に伴いまして、富山港線のライトレール化、あるいは北陸本線の在来線があいの風とやま鉄道へ順調に経営が引き継がれてまいりました。

次は城端線・氷見線のことが今こうして検討されているわけでございますが、もう一つ、富山県のパネルを戻していただきたいのですが、県東部です。

県東部の話はあまり出ておりませんが、東部というエリアは非常に大事なところなので、富山地方鉄道がここを今経営していらっしゃるわけです。もちろんあいの風とやま鉄道もやっていますけども、富山地方鉄道は滑川、新川方面、そして黒部、宇奈月、そして宇奈月からさらにこの黒部鉄道、キャニオンルートのことも今出てまいりました。こうしたことで、どうアクセスをつなげていくのかということも、これから大きな課題になってくるでしょう。

それから、富山県の目玉であります立山黒部アルペンルートも、やはり上市や、あるいは立山地区のアクセスも今富山地方鉄道がエリアとして営業しておられます。こうしたものも、今、富山地方鉄

道がどんなふうにこれから経営するかというと、相当の検討をしないと、なかなか引き継いでもらえないのではないかと思います。

それからさらに、パネルに載っていますが、八尾へ行く高山本線があるんですね。これは八尾から岐阜県に抜ける路線もあります。

こうしたことを総合的に判断すると、まだまだ富山県の鉄軌道の中に、大変大きな、これから進めていかなければならないことがたくさんある。そうしたこともしっかりとこれから十分に皆さんと連携をしていかねばなりません。それがこれからの課題ではないかと思いますが、今、田中局長のほうでは、こちらの話はほとんどまだそこまで行っていないということでしょうかね。東部のほうの関係はどうですか。

田中交通政策局長　東部ということで、富山地方鉄道、高山本線の話もちょっとありましたけど、高山本線に関しましては、先日の富山市議会であいの風とやま鉄道への移管の可能性を問われましたが、市当局から移管検討の趣旨の発言はございませんでした。また、地鉄とあいの風とやま鉄道も、今お話がありましたけど、これについては知る限り、地元からは具体的な話は聞いておりません。

米原委員　これは、まだそこまでの状況になっていないと思います。これからのこういった公共交通というのは、道路と同じようにしっかりと支援をしていかねばなりません。この間、国交省の鉄道局長で、両親が富山県御出身という村田茂樹さんの記事がマスコミに少し出ていましたけど、しっかりとこれからこうした公共交通の支援をしていかねばならないとおっしゃっておられました。

そういうことからすると、時間は少しかかるかもしれませんが、一つ一つ解決していかねばならないわけですが、あれもこれもとい

うわけにいきませんけれども、やっぱり富山地方鉄道の経営実態、それから、東部のアクセスと公共交通というもののグランドデザインはどんなふうにしていくのかということをしっかりと検討していかねばならないときも、もう近い将来に迫っているのではないかと、私はこう思いますので、考えを聞かせてください。

田中交通政策局長　県では、昨年度から地域交通戦略会議を立ち上げまして、持続可能な地域公共交通ということで様々な議論を行っております。

その中で、持続可能で最適な地域交通サービスを実現していくためには、委員からも御紹介ありましたけど、地元のまちづくりとの連携は不可欠と、このようなお話もありまして、私も全くそのとおりだと思っております。

このため、今のお話、幾つかありまして、路線の話もありましたけども、やはり地元でどのように投資し、地域の方がどう参画、関わっていくのか、その内容についても十分考えていただく必要があると思っております。

米原委員　ぜひそれはこれからいろんな特別委員会の中で、またいろいろと議論していきたいと思っております。田中局長は今一番大きな役割を担っていただいているわけで、大変御苦労は多いと思いますが、ぜひひとつ、また皆さんと一緒に力を合わせて頑張っていきたいと思っておりますので、よろしくお願いいたします。ありがとうございました。

そこで、知事にお伺いしたいのですが、今申し上げたように、県全域の公共交通体系の再構築は喫緊の課題です。したがいまして、県が主体的に関わっていかねばならない。私は知事が先頭に立って、

この実現に導いていく必要があると考えますが、知事の所見を伺っておきたいと思います。

新田知事　少子化あるいは人口減少、人を運ぶ公共交通にとって、これはやはり厳しい状況だと考えております。そんな中でも、まさにお示しになった鉄軌道王国富山のこの公共交通を持続可能な形で確保していくということは極めて重要な課題と考えていまして、私自身もこの地域交通戦略会議で毎回議論に参加しております。これまでの会議では、戦略の基本的な方針、また、ネットワークの目指すべき姿、地域の活力、魅力の向上に向けた関係者の役割、責任分担ということについて了承いただいてまいりました。

私としては、県と15市町村がまさにワンチームとなって取り組むことができるように、県が先頭に立って進めていると考えております。

将来像のことですが、あのパネルに見えるように、15市町村全てに鉄道の駅があるというのは富山県だけであります。これをぜひ強みとしていくということが大切だと考えています。

そのためには、住民の皆さんに、我が町の駅、我が町の鉄道、そんな鉄道を我が事とぜひ考えてほしいと思うんです。市町村にとって地域交通サービスは公共のサービスだということ。次世代につながる投資という観点でしっかりと取り組んでもらいたいと思いますし、また私ども行政はしっかりとこれに投資をしていく。交通事業者さんの側面支援という立場で今まではまいりましたが、これからは我々行政も投資をしていく、主体的に関わっていく、そんなことが必要だと思っています。

委員に御紹介いただきましたように、富山ライトレールは、富山

市が沿線のまちづくりや市民の機運の醸成をうまく行っていかれました。そして、今の形につながっているのだと考えております。

米原委員　同じことを申し上げます。国交省は、人口減少の中、今まで道路を中心に社会資本の整備を行ってきたということでありますが、やはりこれからの時代というのは、公共交通をしっかりと残すのは、もちろん全部ができるわけではありませんので、ひとつ地域のまちづくりのために、どういうやり方で運営をすればいいかということも十分検討して、スクラップ・アンド・ビルドではありませんが、しっかりと地域、将来のためにどういうビジョンを示していくのかということがこれから大きな課題になっていくと思いますので、ぜひひとつ、知事が先頭になって働いていただきたいと思いますので、よろしくお願い申し上げたいと思います。

それで、ここ最近、新聞の記事を見ると、ともかく公共交通の記事がたくさん出ている。ぜひ富山県を全国のモデルケースにしてください、富山県を全部のモデルにしてもらいたい、こういった記事も出ています。本当にたくさんの記事を私もスクラップしているので、まだまだたくさんあるんですけど、本当に皆さん関心を持っていらっしゃるということだけ十分理解した上で、また取組をいただきたいと思います。よろしくお願い申し上げます。

次の質問に入ります。

高岡テクノドームについて、御関心のある方がいらっしゃるかと思います。今日までこの議会で、武田議員、安達委員、それから川島委員、針山委員、一昨日は菅沢委員が結構触れられました。

私は菅沢さんの話を聞いていて、もう与党の人になられたのかなと思うぐらい、非常に何といいますか、随分皆さんの気持ちになっ

てお話をされておられて、菅沢さんってこういう人だったのかなと思って実はびっくりするぐらい、何かこうぐっとくるものがありましたね。やはりいろんなことを考えておいでになるんだなということを改めて私はよく理解したつもりです。これからもそんな気持ちでひとつまた、お互いに連携してやっていきたいということを思っておりますので、ぜひお力添えをいただきたいと思います。

さて、この高岡テクノドームでありますけれども、これは1991年、32年前にできました。今も、こうしていろんな各省の方が来ておられますけれども、当時、田中徳夫さんという方が経産省から来ておられました。その方といろいろお話をした中で、当時、富山空港の横にテクノホールがあって、それ１つでした。石川県を調べたら３つありました。４号館も建設予定というようなこともございまして、できればぜひ高岡にテクノドームというか、２号館を検討していただきたいということを実はお願いしました。私が言ったからできたものじゃないと思いますが、これを提案した１人です。

その後いろいろあって、この高岡テクノドームが、県や高岡市や地元経済界が中心になって造られ今日に至ってきたわけですが、このテクノドームは展示会などの開催、あるいは研究開発型企業の育成による産業の創出などを通じまして、県西部地域をはじめとして県内経済の活性化に寄与する施設であると。このドームは、大展示場や会議室、インキュベータ室などを備えて、県内産業の研究機関を支える戦略的な拠点として、またビジネスチャンスを創造するコミュニティー空間として、新しい産業の創造と交流活動の支援を担うことになっているということです。全くそのとおりです。

しかし、今現実はどうなのかということです。私の知る限りでは、

ここの大展示場は確かによく使われておりますけれども――これはあまり使われていないという話もありましたが、私の知る限り、よく中古車センターのテレビのコマーシャルをやっています。家具のコマーシャルや仏壇もやっている。駄目だとは言いませんが、もっとそれ以外にいろんな使い方もあるのではないかと思うんですね。

例えば、このエリアは新幹線の新高岡駅もできましたし、もっと産業展示というか、イベントといいますか、地域全体が活性化するようなイベントというのを本来は開催していくべき施設だと私は理解しているんですが、どうもそうなっていないというところが、実は私が今回のいろんなことを申し上げた背景もそこにあるわけです。

したがいまして、中谷部長にお尋ねしたいのですが、今高岡テクノドームはどういう利用状況になっているのか、どんな課題なのか、これまで果たしてきた役割や成果をどう考えていらっしゃるか、まずお伺いしておきたいと思います。

中谷商工労働部長　大展示場の利用状況につきまして、コロナ禍前でいいますと、平日を含む利用率は60％前後、ただ土日の利用率は80％前後で推移しております。そういう意味では、おおむね順調な施設利用がされてきたと考えております。

現在は、コロナ禍の影響を受けて休廃止された大型催事の幾つかが復活してきております。また、新規催事の利用が入るようになっていまして、令和５年度は、コロナ禍前の六、七割程度には回復してきていると考えております。

近年では、周辺環境の変化に伴って、親子をターゲットとしたアニメキャラクターや鉄道などのイベントが開催された事例もございますが、今お話がありましたように、住宅設備、家具、家電、自動

車関係の展示会が多く、こういうものの安定的な施設の利用につながっているという面がある一方で、定期的なこういう産業展示、商談会で、土日の催事は固定的なものになっていると思っております。

また、今お話がありましたように、施設が築30年を超えるということで、今後空調などの大規模修繕の必要が見込まれております。あわせて、県内外から幅広い世代の方々に集まっていただいて、交流を促進するための環境を整えていくことも大事だと考えております。

米原委員　そこで、菅沢委員からもこの話をこの中でおっしゃったと思っているのですが、ドーム別館の見直し設計の進捗状況等について少しお尋ねをさせていただきます。テクノドームの別館については、県西部の経済活性化、地域活性化のために、前の知事が計画されて、基本計画、設計、そして新田知事の下で民間活力導入可能性調査と実施設計が行われましたけれども、結果は御存じのとおり、不落になりました。そのことについても、話せば長くなるのですが、確かに私は見たときに、正直申し上げて、これ何なのかなと思いました。

これは、ウクライナの侵攻であるとか、大阪の万博の工事の加速化とか、資材の高騰、人件費の高騰、時代が大きく変化してきたことは事実でありますけども、この意匠性といいますか、建築デザイン。僕は県の人たちが、どうも何かあったら箱物は――学校とか何か今のは地元の設計でやられますが――、大きいものはみんな県外の業者に任されるというところがある。ところが、私に言わせると、その人たちは地方のことは分かっておられません。私は、地方なら地方に合ったものをやっぱりやるべきだと、そして斬新なものをや

るべきだと思います。そういったことを、いろいろと設計を見ますと、何かちょっとどうなのかなと思っておりました。

最後は、見積りが出た結果、あまりにもこちらの状況とかけ離れていて受けられないということで、不落になったという。もうそこで立ち止まってしまったと、そういうのが今日までの現状かと思います。

いずれにいたしましても、今この状況の中で考えたらどう整理するか、皆さんも今日、話をしておられた。十分な検討がなかったじゃないか、あるいは、そういう協議が不十分だとか、皆さんはいろんなことを今日おっしゃっておられます。いろいろ意見があるでしょう。

私が最初に申し上げたのは、これは基本でした。そういう中で、今の状況と進捗状況を見て、どんなふうに見直しをされて検討されておられるのか。横田副知事さんに、お願いします。

横田副知事　高岡テクノドーム別館整備について、設計を含めて一度立ち止まって検討すると申し上げて以降、建設市場では資材の高騰、労務費の上昇の影響により建設コストが高止まりしておりまして、こういった状況は当面続くものと認識しております。

その中で、現在どういう検討をしているのかという御質問でございますけれども、現在、県西部地域の県民から必要とされ、関係6市や県経済界の皆さんが主体的に活用を推進していただけるような施設となることを基本に置きながら、まず、デジタル技術の進展、カーボンニュートラルなどの社会的要請、県内の新たな文化施設の開業等の影響など、別館整備を取り巻く情勢の変化を確認しつつ、本館も含めまして、テクノドームの利活用方策の県庁内部局横断的

な検討を進めているところでございます。

さらに、他の自治体の施設の運営や整備状況の調査などもしておりまして、地域活性化につながっていくために、どのような催事や利用がテクノドームで考えられるのか、こういった検討を行っているところでございます。

設計につきましては、費用を抑える修正のみを行って再度入札公告を行うという状況ではなくて、まずは、今の論点を整理しつつ、関係の皆さんの意見を聞いていくための準備をしているところでございます。

米原委員　改めて申し上げますけど、今日お尋ねになった方も皆、いろんな御意見があると思うのですが、この西部の今のテクノドームの別館について、こういう結果になったことは残念。もし、ウクライナのことや、機材の高騰などそういうことがなければ、そのまますっといってしまったかもしれない。だけど、これだけ世の中が大きく変わってしまったということからすると、トップとすれば、これはしっかりと受け止めて、どうそれを判断するか検討するのは当たり前だと私は思います。したがって、今日に至ったということは、これはもう状況が大きく変化したからです。

したがいまして、私が申し上げたいのは、もともと本館をリニューアルして新しい産業展示を行えるような施設にすればどうかということを、私は当時、総務省の方々あるいは経産省の方々に相談しました。何かこれを新しくうまく利用できないかと。建物も32年近くたっているから、何か検討できないかと言ったときには、ｅスポーツの関係であるとか、バーチャルリアリティーだとか、そういう使い方もあるんじゃないかと。５Ｇの話もあって――知事は、もう

５Ｇも時代遅れみたいなことを昨日かおとといかおっしゃいましたけど――、いろんなことを使って、カーボンニュートラルなど今いろんなことがあって、そういうものもこの機会にもう一回見直した上で、現在の建物を少し利活用して新しく改造し、何か新しいものを考えることもできないかと。

来年は、もう敦賀まで新幹線が開業して、新高岡から福井まで40分で結ばれるような、そういう立地条件も大変いいところでもありますし、産業振興、地域活性化を行いますと、現在の場所というのは極めて立派ないい施設だと私は思います。

そういうことからすると、何でもかんでも新しくすればいいというものではない。２つあればいいという話もある。それは今の現状では、両方はとてもできないと思います。だから、まず一遍今のものを直して、新しいものに改造して、それで何か新しいものができた上でまた次のことを考えるというのだったら、私はこれも選択の一つではないかなと考えますが、これは知事に判断してもらわねばならん。そのことについて、今お尋ねしたことについてどう判断されるか、知事の考え方をお尋ねします。

新田知事　高岡テクノドームは、高岡にとって、また県西部にとって、そして本県全体にとっても、とても将来のポテンシャルがあるいい場所に立地しているということは何度も申し上げているとおりです。

来年３月16日、北陸新幹線の敦賀延伸、この経済効果も見据えまして、地域の活性化、また、交流人口の増加に向けて、高岡テクノドームの活用の促進を図っていくことは重要だと考えております。

一方で、これまでにない建設費の高騰が続いて、応札者が現れないという状況に直面したわけであります。この別館の整備について

は、現状をよく分析した上で議論していく必要があると考えています。

今ほど本館のリニューアルを先行させてはどうかというお話をいただきましたが、本館は開館から32年経過しています。この間、大型スクリーンを設置したり音響設備もよくしたり、随時必要な設備を導入してまいりました。

ただ、大規模な修繕が必要な時期を迎えているのは確かです。また、産業展示施設という建物の性質上、床面はコンクリートですから、音の反響が大きくて、いわゆる若い人が望まれるようなライブ、コンサートなどを開催するには音響面での課題はあると考えております。

先ほど副知事から答弁したように、現在、県庁内で検討を進めています。今後また関係の県議の皆様、また高岡市をはじめ県西部の６市、そして地元経済界の御意見、これらをしっかりとお聞きして、高岡テクノドームがこれまで以上に地元の皆さんに愛され、活用され、そして地域のにぎわいや県西部の活性化につながるにはどうするのがよいかということをよく考えて方針を定めてまいりたいと思います。

米原委員　今日もちょっとさきの休憩時間に話していたんですが、今の知事がおっしゃるようなことをもう少し早く、かかる前に、地元の皆さんとあるいは地域の皆さんともっと協議をして、どういうふうなものをやるかというぐらいのことを本来はやるべきだったというところも、私は欠けていたなと。何か建物を建てることが先行していたような感じがするんですね。

失礼ですが、業者の方は、建物を建てるのは非常に得意かもしれ

ませんが、運営することは皆さん不得意です。私が言っているのは、その建物をどう運営するか、どう利活用するかというところのノウハウが足りないと思います。

今回もこのことについて随分、土木部の皆さんや商工労働部の皆さんとも話をしましたけど、分かっている方はほとんどおられません。何か仕事としてやっておられる気がします。それじゃなかなかいいものになりません。ですから、そうであればもっと専門的な方を呼んで、しっかりと勉強して、これもやればどうかということを聞けばいいんですよ。僕は災害のことと言うたって、現場のことは誰も分からないけど、建設会社のほうに聞いたら、すぐ現場のことは分かりますよ。振興会長に聞いたらすぐ分かりますよ。直接聞いたらどうですか。朝から晩まで会議ばかりしているのでは駄目ですよ。地元の人たちをもっと巻き込んで、巻き込むという言葉は悪いけど、来てもらって、いろいろ相談し合って協力してもらってどうするかということを考えればいいんですよ。そういうところが私はちょっと欠けているなと。

まして、今、若い人たちは現場のことを知りません。これから仕事される方は、地域の人たちをもっとうまく利活用して、これから人手もどんどん足りなくなってくる、高齢化が進んでいく、働き方改革何だかんだでみんな厳しくなってくる。そういう中で、本当に皆さん大変な思いをして仕事をしていかねばなりません。そういったことを皆さんに協力してもらって、どううまく協力してやっていくのかということを、私はこの中で改めて皆さんにひとつ申し上げておきたいと思いますので、大変失礼なことを申し上げたかもしれませんが、これも地域の皆さんと一緒になって、いい社会のために

頑張っていこうと思っているから申し上げているわけでございますので、よろしく御理解をいただきたいと思います。

次に入ります。

北陸新幹線の敦賀開業まであともう僅か、来年の３月16日と伺っておりますけれども、ようやく敦賀まで、今も試運転をやっています。この間筱岡委員が、めったにあまりいいことを言わない人なんですが、この話だけは私もいいこと言うとるなと思って聞いていたのだけど、神社が横になったとか滑ったとか転んだとかという話をしておられましたが、この話だけは私と全く同感です。

今年、石川県と富山県でＧ７教育大臣会合を共同でやりましたが、こんなことはなかなかできないんです。隣の県と何か一緒に国や世界の仕事をやるということはできませんよ。よく知事はおやりになったと僕は思いますよ。大成功でした。

そしてこの間、三霊山の、それぞれ石川県の知事、そして静岡県の知事も来られて、八尾のおわらに来ていただいて、三霊山の皆さんとの懇談がございました。こうしたことも、これからも連携をしていかねばなりません。まして、北陸３県だったら近い。福井も新幹線で１時間で結ばれるわけだから、３県が一緒になって、やはりもっと取り組んでいくことが私は極めて大事だと思う。富山県だけでどうとかこうとかじゃなくて３県で取り組む。３県合わせて約300万人いないでしょう。270万人ぐらいでしょう。

したがって、こっちの顔を見ておられますけど、竹内さん、地方創生局長として、この３県で何かこういったことを、北陸は１つという中でしっかりとまた進めていこうという考え方を、何かお持ちなのかどうかを伺っておきたいと思います。

竹内地方創生局長　北陸新幹線の敦賀開業によりまして、北陸３県が１時間程度で結ばれる。関西、中京方面から本県も近くなります。首都圏からの北陸新幹線利用者の増加も期待できる。この機会を捉えて経済波及効果を高めていくためには、御指摘のとおり、北陸３県が官民一丸となって取り組むことが重要だと認識しております。

インバウンドにつきましては、広域で連携して誘客を図ることが効果的ということは過去の例からもはっきりしております。これまでも、北陸３県で連携し、アジアを中心に現地商談会参加やメディア、旅行会社の招聘等に取り組んできております。

引き続き共同でプロモーションを展開していこうと考えておりますが、加えて今年度は、観光庁の「地方における高付加価値なインバウンド観光地づくり」事業のモデル観光地に、北陸エリアが採択されましたので、現在、観光庁、北陸３県、北陸経済連合会等の関係者が連携して、高付加価値なインバウンド観光地づくりに向けて、地域の価値、また来ていただくターゲット、こういったものを明確化するマスタープランの策定に着手しております。

当面、成長が見込まれますインバウンド誘客を地域経済の活性化につなげられるよう、関係者一丸となって取り組んでいく覚悟であります。

また、来年７月には、北陸３県が連携してＪＲ大阪駅の近くに設置いたします、関西圏情報発信拠点が業務を開始する予定でございます。こちらの施設も有効に活用して、情報発信や観光誘客、これを３県共同で取り組みたいと思います。

また、現在、北陸経済連合会さんで北陸ＤＭＯの立ち上げについて検討中だと伺っております。

これら官民双方の取組を通しまして、これまで以上に「北陸は一つ」でインバウンド誘客や経済交流に努めまして、交流人口の拡大、地域経済活性化を図ってまいりたいというふうに考えております。

米原委員　３県の知事も非常にうまく連携してやっていますし、しっかりと各部の皆さんとも連携しながら３県が力を合わせてやる。３県力を合わせたら、すごくまた魅力的ですよ。そういうふうなＰＲの仕方も考えていただきたいと思いますのでよろしくお願いいたします。ありがとうございました。

時間もあと僅かですが、知事に最後にお伺いしたいことがございます。

私は昭和62年、1987年に、富山県議会議員として初めて議員にならせていただいて、もう早いもので随分時間が経過いたしました。

そのとき、知事は中沖豊さんでした。中沖さんはどんなふうにいつもおっしゃったかというと、たまに「おい、蕃さん。若い者はどんなことを考えているんだ。ちょっと来いま」と言って知事の部屋に呼ばれて、いろんなことを教わったことがあるんですが、こういうことを考えている、ああいうことを考えている、しかし、若い人たちのことを考えているかということもよく話をされました。そして、その後、知事はこんな目標を定められました。

３つあるのですが、一つは健康・スポーツの県、一つは花と緑の県、もう一つは科学と文化の県ということで、３つの日本一の目標を挙げられました。さらに、社会資本の整備を行わなければならんということで、2000年国体を誘致されました。今から23年前です。

そのときの富山県の汚水処理の人口普及率、私の知る限りでは、たしか県内で平成元年は29％、これを2000年の平成12年には74％か

75％、もう今は100％近くなっていると思いますが、普及されました。私も当時は砺波に引っ越す前だったのですが、多分砺波の普及率が10％あったかないかですね。玄関に入ってぷーんと何かこう臭いが鼻につくような感じでした。ですから、子供さんがなかなかお産に帰りにくいということをよく耳にしたことがございます。

しかし、そういったことも、やっぱりいろんな意見を聞かれて、社会資本の整備として汚水処理の人口普及率に努力されたのではないか。その後、ジャパンエキスポも立ち上げられました。こういうのは、私は中沖さんとの思い出として、たくさん残っております。

もうお一方は、知事も大変御関係のある綿貫民輔さん、元衆議院議長さんでありますが、雪を克服して、そして北陸と東海道をつなぐ道路、この建設に大変な御尽力をいただきました。中部縦貫道路の完成にも努力されましたし、今日の利賀ダムの着工にも大変な御努力をされました。

皆さん、これは昔の冊子ですが、これは、誰か分かるでしょう。綿貫さんです。ちょうど国土庁長官になったときです。この方、分かりますか。中曽根さんです。これは、ヘリコプターに乗って、東海北陸自動車道の上から、名古屋から富山県に道路をつなぐ地図を見せて、ここに道路を造りたいんだということをここで説明しておられたんです。綿貫さんは、夢を持っていろんなことを私たちに語ってくださって、そういう積み重ねが、今日の私たちの地域の発展に結びついたわけです。まだまだたくさんありますが、代表的なものを今申し上げました。

もうお一方は、森喜朗元総理です。綿貫さんは道路関係。俺は北陸新幹線をやるからということで、北陸新幹線の悲願を北陸３県と

力を合わせて努力されました。

では、一人でできたかというとそうではなくて、これは沿線の人たち、経済界や、特に経済界のドン、私はバン、蕃ですけども、当時のドンは北陸経済連合会の原谷敬吾さんという方でした。この方が非常に経済界の中心的な役割を果たしておられて、そして、森さんと絶えず連携して、瀬島さんのほうに行かなきゃいかん、どこどこ行かなきゃいかんと言って、私どもはみんな中央のほうに行って新幹線の陳情をさせていただいた。もうその回数は何百回、私らは中央のほうに足を運んだつもりです。そうしたことを積み重ねながら、北陸３県の悲願がこの新幹線に結びついたということです。そして、皆さんと様々な合意形成があって今日に至ったわけです。

そこで、私は何でこういったことをあえて申し上げたかというと、知事に申し上げたいのは、今知事はウェルビーイングということをよくおっしゃっておられます。県の方も最近、この言葉をよく使っておられます。ウェルビーイングという言葉も少しは浸透したかもしれません。しかし、私たちの政治の世界というのは、これからの次の時代に私たちはどういうような社会をつくっていくのか、どういうようなことを県民の皆さんに知らせていくのか、レガシーという、何をこれから次代に残していくのかということも考えていかねばなりません。こういうことからすると、今特に私が心配なのは教育です。

今日、教育長もいらっしゃいます。このことについては、また常任委員会で質問させていただきたいと思いますが、ただ生徒が少なく、人口減少化だからこうだというのではなくて、少なくてもその子供たちは、みんなこれから将来のある人たちです。この人たちが、

これからの社会の中でどのように活躍していけるか、これから皆さんが、どういう道で誇りを持って自分の仕事に就いてもらえるか。スポーツもありましょうし、いろんなやり方があり、たくさん子供たちの夢があるかと思います。その子供たちにどんな夢を与えていくのかということも、これからの政治で、私ら議員も含めて、私は必要ではないかと思っているわけです。

私は本当にたくさんの皆さんに教えていただいて、今日何とかこういった役割をやっておりますけれども、大変ありがたいことだなと思っています。そんな長く私もやるつもりはありません。いつでもしまいますので。ともかく、あとは皆さんしっかりと地域のために頑張っていただきたい方々ばかりでございますので、ひとつ知事さん、今の話を聞いて、何か参考になることなり、今、レガシーのこともちょっと申し上げましたけど、知事の思いをひとつ聞かせていただければ幸いでございます。よろしくお願いします。

新田知事　ありがとうございます。御質問、あるいはまた激励というようなお言葉をいただいたと受け止めました。

富山県の、また北陸の偉大な政治家であられます綿貫民輔先生、また森喜朗先生のお話もいただきました。そして知事として、大先輩である中沖豊知事の話もお聞きしました。レガシーはどうなんだというお尋ねもありました。それと、教育の重要性もおっしゃったと理解しております。

昭和22年に初めて本県の知事が直接選挙で選ばれてから、私で７人目の公選の知事となります。ちなみに、２人目は私の祖父である高辻武邦知事でありますが、歴代の知事の皆さんは、戦後の復興期、また高度成長期、さらにバブルの時代もありました。世界の経済、

社会情勢が変化していく中で、国策なども踏まえられて、豊かな自然環境の保全、また県土の有効利用、治水、災害防止、利水による電源開発と産業振興、そして北陸自動車道、北陸新幹線、空港、港湾、これは社会インフラ基盤の整備、そして行財政改革。それぞれの時代において、時代が求める、県民が求める、そして県民のための県民福祉の向上に向けた課題への対応と併せて、中長期的な展望に立って本県の未来のビジョンを描き、そして本県の発展に尽力されてこられました。その皆さんの背中を見ながら、私も仕事をさせていただいております。

そんな先輩方の御尽力のおかげで、本県には今幸せの基盤がそろっていると認識して、大変感謝しているところでございます。歴代の知事のリーダーシップ、そして先人の皆様の力を尽くされた成果、それで今富山県には、この幸せの基盤というものがそろっていると思っています。

我が国は今、言うまでもなく成熟した国家となりました。人口減少、あるいは国際情勢などによりまして、経済社会が大きく変わっていこうとしています。私は、この先人の皆さんのお力尽くしによって培われた本県の魅力ある地域資源、また経済社会インフラを十二分に活用すると。先輩方のレガシーを活用させていただく、さらに、これらの幸せの基盤を今の時代のニーズに応じてさらに拡充し磨き上げていくということ、それをやっていかなければならないと考えています。それとともに、これまでにないやり方で新しい富山県のさらなる発展を実現したいと考えています。

そのために、就任して３か月後に立ち上げました富山県成長戦略会議、ここでかなり突っ込んだ議論を続けた結果、「幸せ人口1000

万～ウェルビーイング先進地域、富山～」という戦略のビジョンを掲げました。これは、富山の強みを最大限に生かし、そして弱みはなるべく減らしていく。これによってウェルビーイングの向上を図っていく。そして、次の世代の価値を生む人材が富山に育っていく。また、ウェルビーイングが高い、そんな富山に県外からも人が引き寄せられてくる。富山に集積してくる。これを戦略の中核に据えているんです。

本県発展の礎となるのは、やはり人づくりです。人づくり、そして新しい富山県をつくる、新しい社会経済システム、これを構築しようと考えています。人づくり、そして社会経済システムを新しくする、この２つです。

まず人づくりですが、本年の５月に皆様方の御協力を得て、また史上初の２県開催という形で、富山、石川が協力し合ってＧ７富山・金沢教育大臣会合が行われました。そこにおいて、ウェルビーイングの向上策が富山・金沢宣言の中に盛り込まれています。今後、本県の教育においても、子供たちのウェルビーイング向上の取組を進めることにしております。

また、経済発展の起爆剤となるのがスタートアップです。このスタートアップをつくり出すことに向けて、スタートアップのエコシステムと言いますが、つくり出す環境づくりですね。やはり技術戦略、資本戦略、あるいは販売戦略、いろんなものが必要になってきます。富山県には今あまりそれがありません。というか、ほとんどありません。東京にはあります。渋谷にはあるから、みんな東京に行って起業してしまうんです。それを富山にもつくり出していきたい。そんなことに今挑戦をしています。

そして、企業マインドを醸成していくということ。また、突き抜けた起業家に去年、今年と集中的に支援をするという事業も行っています。そんなことで、起業家の育成を進めることにします。

そして、何も金持ちをつくっていこうということではないんです。そんな起業家を目指す上で、若い人たちが、あるいは若くなくてもいいですが、起業しようという人たちが目指す、言わばお手本をつくりたいと思っています。それを今、集中支援することによってつくっていく。そうすることによってスタートアップ、富山なら新しい挑戦ができる、新しいチャンスがある、夢をかなえられる、そんな富山県にしていく、その目指す人たちを大いにつくり出していきたいと考えています。

さらに、デジタルということがあります。デジタルの活用が急速に進展する中で、今、富山県立大学にはＤＸ教育研究センターができました。そして、来年４月に情報工学部の設置を進めておりますが、データサイエンス学科も新しくできる予定になっております。そこで、このＤＸの人材の育成強化を図ってまいります。

また、郷土の歴史をはじめ、しっかりとした歴史観を持った上で世界に出ていって、グローバルに活躍できるような子供たち、そんな人材育成も進めてまいりたいと考えています。人づくりについては、そんなことを今目指してやっているところでございます。

もう一つ大切なのが、新しい社会経済システムをつくっていくということ。レガシーと言われるならば、そういうことになろうかと思います。この新しい社会経済システムをつくるというと、これも大きな挑戦と思っております。常に変化して多様化して複雑化していく。行政に対するニーズは本当に変わってきています。それに的

確に、また効果的に対応するには、我々職員だけでは、もうなかなか知恵もパワーも足りない時代に入っています。では、どうするのかということで、これは民間の人たち、民間の事業者であり民間の団体と一緒に、そして県民の皆さんと密接に連携を取っていくということが大切になると思います。

具体的には、今年も来月に開きますけども、これで３回目の成長戦略カンファレンスを、そんな場で民間の人たちと大いに議論し知恵を出し合っていく、そして官民連携を進めていく、そんなことを今進めているところでございます。そのために、県庁に入って一番分かりやすいところに官民連携・規制緩和推進デスクというものをつくって、本当に毎日のように民間の方が相談にお見えになっています。県庁も広いので、私も今でも迷うぐらいですけども、民間の方が来られて、こういうことをやりたいんだと、県庁と一緒にやりたいんだと、それをそのデスクで振り分けてあげて、しかるべき官民連携を促していく、そんなことも今つくり上げてきたところでございます。そんなことで、新しい連携による新たなプロジェクトがどんどんできていくことを目指しています。

そして、先ほど来御質問にもありました地域公共交通サービスです。もうはっきりこれは公共サービスとかじを切ります。地域の活力、魅力の向上に向けて、役割、責任分担として自治体、県民の役割をはっきりと示しました。

我々行政としては、投資をしていく、そして住民の皆さんには参加していただく、参画していただく。我が事として、交通網をもちろん利用していただき、そしてその沿線のまちづくりもしていくことにつなげていきたいと思います。

こういう今申し上げた人づくり、それから新しい社会経済システムの一部を今例示させていただきましたが、この構築というのは、私は将来に向けた大切な投資だと思っています。これらの取組が今後、レガシーと言われればレガシーになるのかもしれません。残すべき未来への遺産を生み出すことになると考えております。

今後もこうした取組を通じて、未来の子供たちにとって、希望に満ちて、ワクワクすることがたくさんあって、チャンスがあって、夢がかなえられる富山県、これを実現してまいりたいと思っております。

ちょっと長くなりました。すみません。

米原委員　ありがとうございました。終わります。

永森委員長　米原委員の質疑は以上で終了しました。

以上をもって、本委員会の質疑は全て終了いたしました。

委員各位におかれましては、長時間御苦労さまでした。

終わりに、本委員会の運営に終始御協力を賜りました議員各位、県当局並びに報道機関の各位に対し、深く敬意を表します。

これをもって、令和５年９月定例会の予算特別委員会を閉会いたします。

御苦労さまでした。

午後４時11分閉会